

87年回顧 県内

〇〇11

すでに師走も残すところ幾ばやまなり。一年をふりかえりてふやむに、新設画廊の出現めざましい企画記念展、他界した美術家たち、そして幾つかのグループ展や個展が思い出される。総体的には否応なしに美術界全体の大きな転換期を感じさせる。

今年、最も記憶に残る出来事は、果たにまなましくして静かに偲ぶこともできないほど、最後の大木が倒れたような大嶺政寛画伯の急逝である。毎年十二月一日にオープンする恒例の個展ではあったが、今年は何回か書斎記念展と称して、華やかに開催され、その充実した個展が終わって丁度二週間目の二十日の日曜日、とつぜん亡くなられた。その存在は大きく、戦後美術から現在に多くの影響を与えてきた。その終焉は一時代の終焉を感じさせる。この大御所とは対照的であるが、もう一つの墓碑銘は、四十六歳の

美術

星 雅彦

転換期感じさせる

大嶺、普天間氏逝く

石膏版画には定評があった。このお二人、ほんごに惜しまれてならない人材である。とこの新設画廊では、三月十四日に開設記念として「那覇近現代美術展」をひらいた那覇市民ギャラリーが、

せてスタートした。また、電波堂三階には多目的空間として、五月にスペース・アートが新設され、そのこけら落としに「開業三十年城間喜楽展」を開催した。その後のスペース・アートは不便さが要因らしく、さほど活動でないようであるが、那覇市民ギャラリーとギャラリーみやぎは、毎週入れ替わる展示を継続させている。一方、企画展を主体とする画廊沖繩やギャラリー小泉などの他の画廊も、中

作を主体としない場合の個展には、批判の声も聞かれた。また、新聞紙上の「展評」を軸にした批評活動については、A画家がB画家を書いて賞賛し、次にB画家がA画家を賞賛して書く傾向が濃厚に出た。そこには要めて掲載してくれたいという姿勢が見え、批評精神どころか、それに反する馴れ合いが透かし見えてきたと言えよう。更に団体組織のあり方や、審査や選考制などへの不満の声もちらほら出てきた。例えば入賞した作品が、審査員真実画(乃至半抽象)を逆さまにして審査し、それを抽象画として入賞させた珍事があった。その類はたまたまのことだが、作者の傷つき様を無視して不問に付す例は少なからず放つておけないだろう。作者の過失云々よりも、審査の乃至審査員の体質を糾明すべきかもしれない。

今年、最も記憶に残る出来事は、果たにまなましくして静かに偲ぶこともできないほど、最後の大木が倒れたような大嶺政寛画伯の急逝である。毎年十二月一日にオープンする恒例の個展ではあったが、今年は何回か書斎記念展と称して、華やかに開催され、その充実した個展が終わって丁度二週間目の二十日の日曜日、とつぜん亡くなられた。その存在は大きく、戦後美術から現在に多くの影響を与えてきた。その終焉は一時代の終焉を感じさせる。この大御所とは対照的であるが、もう一つの墓碑銘は、四十六歳の



故 大嶺政寛さん



故 普天間敏さん

り、四月二十八日にはギャラリーみやぎが開廊記念に「現代沖繩絵画選抜展」と称し、ほとんどの画家たちを網羅する。その展示すべてを列挙するのは、困難な作業なので、筆者の印象に残った展示や記録を頼りに思いつくままに取り上げてみる。伊江隆入展、高良松一、仲元清輝個展、ウエチヒロ絵画展、与那覇朝大個展、城間喜楽展、具志堅

が、各所で開催される展示の数は、もはやすべてを網羅することが困難なほど多くなっている。その展示すべてを列挙するのは、困難な作業なので、筆者の印象に残った展示や記録を頼りに思いつくままに取り上げてみる。伊江隆入展、高良松一、仲元清輝個展、ウエチヒロ絵画展、与那覇朝大個展、城間喜楽展、具志堅

(詩人)